

学校法人 城西大学

JOSAI INTERNATIONAL CENTER for the Promotion of Art and Science (JICPAS)

学校法人 城西大学

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26

☎03-6238-1300

http://www.josai.jp/

Newsletter

学校法人城西大学創立40周年記念
東京紀尾井町キャンパス開設記念特集号

Josai University Corporation

3-26 Kioi-cho, Chiyoda-ku, Tokyo ☎03-6238-1300 http://www.josai.jp/

No.1



シンポジウム「ジェンダーで読む『韓流』ブーム——なぜ『冬のソナタ』か」は、紀尾井町キャンパス開設記念事業の一環として、城西国際大学ジェンダー・女性学研究所／城西国際大学大学院女性学専攻／城西短期大学の共催のもと、2月26日（土）に東京紀尾井町キャンパスにて開催されました。

日韓友情年にあたって、いまや社会現象と

シンポジウム

「ジェンダーで読む『韓流』ブーム——なぜ『冬のソナタ』か」

2005年2月26日（土）午後1時30分～午後4時30分
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

1. 〈物語〉としての『冬のソナタ』
パネリスト…水田 宗子（城西国際大学学長）
2. 『冬のソナタ』の女性像を読みとく
パネリスト…尾形 明子（東京女学館大学教授）
3. チュンサンに見る男性像の新しいさ
パネリスト…岡野 幸江（法政大学講師）
4. 今なぜ『韓流』か
パネリスト…姜 尚中（東京大学教授）
5. 〈冬ソナ・ヨン様〉ブームを読む
特別ゲスト…田代親世（韓国ドラマ評論家）

あいさつ…和智綾子（城西国際大学教授）
司 会…長谷川啓（城西短期大学教授）
北田 幸恵（城西国際大学教授）
共 催…城西国際大学ジェンダー・女性学研究所
城西国際大学大学院女性学専攻
城西短期大学（城西ベース・カレッジ）

なっている〈韓流〉ブームをジェンダーの視点から解明し、このブームを生み出している中高年の女性たちが見つけているものは何か、今日の日本社会の状況や日韓の歴史を踏まえつつ探究することは、女性学を研究するものとしての責務と考えたからでもあります。

企画してから2ヶ月間で準備し、広報活動もわずか2週間あまりであったにもかかわらず、冬ソナブームは大変なもので、参加者はあつという間に300名にふくれあがり、嬉しい悲鳴をあげました。会場には入りきれず、別室のモニター画面にて会場風景をみていただく結果にもなったほどでした。

パネリストは、水田宗子城西国際大学学長、東大教授の姜尚中氏、東京女学館大学教授の尾形明子氏、法政大学講師の岡野幸江氏で、特別ゲストとして韓国ドラマ評論家の田代親



世氏にも加わっていただきました。午後1時半から開始し、4時半終了予定が5時過ぎまで延長、熱気あるパネルディスカッションが展開されました。水田学長は「〈物語〉としての『冬のソナタ』というテーマで、『冬のソナタ』を現代のおとぎ話として物語の構造を解明し、主人公たちが共同体のさまざまな障害を乗り越えて恋愛を成就する、小説の前身ロマンズⅡ物語の世界を下敷きに、まれびと（異邦人・よそ者・他者の神話）、父探し／母殺し／孤児の自己探求、死と再生／過去・記憶の喪失と甦り、兄妹の愛、盲目と楽園神話などを仕掛けとしつつ、実は、家族という政治制度と個人の意思、家族の力と個人の恋愛が拮抗する世界であることを指摘されました。

尾形氏の「『冬のソナタ』の女性像を読みとく」では、登場する8人の女性たちに言及

し、ことに女主人公の恋敵チェリンの心理と、物語の要となつてゐるシングルマザーで、男主人公の母親カン・ミヒの複雑な心のゆくえ、我が子を愛する男の子供であることを自分にも周囲にも納得させ、それを支えに生きざるを得なかった女の悲哀を分析されました。また、岡野氏の「チュンサンに見る男性像の新しいさ」では、記憶喪失後の主人公が、家父長制の伝統が根強い韓国社会の記憶が消し去られて欧米生活が長く、軍隊経験もないうえに父親不在の家庭で成長したため男性性や権力を誇示することのない優しさ・包容力に満ちていること、それが冬ソナ・ヨン様人気の要因ではないかと言及されました。

姜氏は「今なぜ『韓流』か」というテーマでポストコロナルな視点から述べられました。日本の植民地支配の終了後も朝鮮戦争により国や家族を分断され、冷戦時代には日本を共産主義から守る防波堤の役割を負わされて、韓国民は気の休まる時はなかったこと、いま埋もれた記憶を掘り起こす歴史のアルケオロジが世界的に展開されているが、韓国でも見直しが始まり、韓国ドラマ



岡野 幸江氏

尾形 明子氏

水田 宗子学長



姜 尚中氏

田代 親世氏



マもそうした作業の一環であること、韓国はこれまでの日本に近づきつつあるが、日本は逆に過去の韓国に後戻りしつつあることなどに言及され、周縁化されてきた日本の中高年女性の韓流ブームは、政治や男性たちが出来なかった日韓の越境を可能にしたと語られました。「冬ソナ・ヨン様」ブームを読む」について語った田代親代氏も、どこか疎外感を抱く中高年女性の琴線にふれるところがあつたのではないかといい、俳優たちの気品・言葉の美しさとか精神性・描写の丁寧さと余白、とくに愛情表現の清潔さなどを指摘されました。

以上、現在の日本に地殻変動を起こしつつある中高年女性たちの希求と行動の本質的解明にまでは十分至らなかつたものの、冬ソナ・韓流ブームに関するアカデミックな場での初めてのシンポジウムとしては、まずは大成功をおさめたといつても過言ではないと思われまふ。水田学

長をはじめJ・Uジェンダー・女性学研究所及び大学院女性学専攻の教職員や院生、本部の職員の方々を中心に、短大の全教職員、経営学科及び別科の教員の方々の総力のもとに成つたシンポジウムでした。



国際シンポジウム

「21世紀アジアと日本の大学と人材開発」

2005年2月14日(月) 午後1時40分～4時

東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

パネリスト…張 済国(東西大学、国際関係大学院教授)

黄 深熾(龍華科技大學管理學部教授、中華中小企業研究發展學會理事長)

大坪 檀(静岡産業大学学長)

張 紀潯(城西大学経営学部教授、中国世界経済学会理事、江蘇省海外交流協会理事)

司会…渡辺好章(城西大学副学長)

主催…城西短期大学

城西大学創立40周年、城西ベールスカレッジ発足、および東京紀尾井町キャンパス開設を記念して、2月14日(月)東京紀尾井町キャンパスB1Fホールにおいて、関係各位の絶大なご支援をいただき標記シンポジウムが盛大に開催されました。

(1) 問題意識とテーマの意味

大学間グローバル競争の激化と旧態依然とした大学淘汰の大混戦期に、近隣アジア諸国の大学事情はどうなつてゐるのでしょうか。産業構造や人口構成の変容、国際情勢や地球環境の変動に対処するために、21世紀アジアにおける日本の高等教育機関はどのようにあるべきなのでしょう。こうした疑問が、シンポジウムの根底に流れる問題意識であり、テーマの意味です。

(2) パネリスト

パネリストには、東アジアの韓国・日本・台湾・中国において豊富な国際経験を有する、大学経営の中枢にある人物を選びました。東西大学・国際関係大学院教授、国際協力委員長張済国氏は、ジョージ・ワシントン大学院で外交学修士を、シラキュース大学ロースクールを卒業して米国弁護士資格を、そして慶應義塾法科大学院で政治学博士を取得しています。さらに伊藤忠商事株式会社や米モレックス株式会社の特別研究員や弁護士として国際的活動を幅広くなさっています。静岡産業大学学長の太坪檀氏は、カリフォルニア大学経営大学院でMBAを取得後、株式



渡辺 好孝副学長



張 済国氏



黄 深勲氏



張 紀濤氏



大坪 禮氏

会社ブリヂストンに入社。経営情報部長、米国ブリヂストンの経営責任者、宣伝部長を歴任、その後、静岡県立大学経営情報学部の教授、学部長、学長補佐を勤めました。1998年より、静岡産業大学に移り現在に至ります。元台湾国立空中大学学長の黄深勲氏は、拓殖大学で商学博士を取得。国立空中大学では教務長、総務長、学長を歴任。現在、龍華科技大学管理学部講座教授を勤める傍ら、中華中小企業研究発展学会理事長、中華民国マーケティング学会理事、中華民国広告学会理事の要職を精力的にこなしておられます。城西大学経営学部教授の張紀濤氏は、中国対外経済貿易大学卒業後、同大学の教師に就任。1978～80年文化大革命後、初の中国政府派遣国費留学生として、大阪外語大学で日本学を専攻。経済貿易大学に専任講師として戻り、1985年に再来日し、東京経済大学大学院より経済学博士を取得。現在、母校の経済貿易大学ほかで客員教授や研究員の資格を有するほか、中国世界経済学会理事、江蘇省海外交流協合理事、日本中小企業海外投資指導員、NPO法人・日中経済発展中心理事長として、日中間の知的交流に尽力しています。

(3) 各国大学事情の現状と問題点(前半)

各国に共通している問題点は、大学間過当競争による合併や淘汰、量的拡大による質的

低下、卒後の就職難と不安定性などがあげられます。根本的原因是に大学を卒業しても、先行投資に見合う、相応の就職先が保証されないことにあります。

例えば、韓国では「キログバパ」(渡り鶴オヤジ)が増えていきます。親父一人が韓国で働き、収入の大部分をアメリカで学ぶ子供と母親に仕送りし、親父は夏休みや正月に母国と米国を行き来します。また、製造業が中国などに移転したため、国内に就職先が不足しており、何千人という規模で「企業インターンシップ」の名のもとに、中国ほかに学生を送り出しています。

日本では、まだそれほど厳しくありませんが、「大卒フリーター」の増加や、「職業専門学校」の繁盛ぶりはその兆候です。もともと状況が厳しくなれば、1年間で取得できるMBAを求めて、米国学やそのためのeラーニングが増加することは間違いありません。企業は「使える人材」を求めているからです。

台湾では、日本留学の熱が冷め、カナダ、オーストラリア、アメリカといった英語圏の大学留学が増える傾向にあります。今後はおそらく中国市場との連携を深め、北京標準語をマスターした学生が、大挙して中国に職を求めて進出していくでしょう。もちろん台湾でも、外国教育機関の進出による競争激化による大学の合併が遂行されています。

中国でも、都市部にある有名大学に学生が殺到し、地方大学は合併による延命策を講じています。中国では就職先を共産党政府が決めるので、精華大学や北京大学を優秀な成績で卒業しない限り、中央政府などへの登竜門に入ることができません。一方で「回亀派」(海外大学卒業後帰国者)が、ベンチャー企業を立ち上げたり政府要職に進出すること、海外留学が就職に有利に作用してきている面もあります。

(4) 21世紀大学間グローバル競争、人材開発など(後半)

21世紀大学事情の潮流分析と現実的対応策について、パネリストよりそれぞれ10項目前後の説明がありました。わが国の大学の将来について、それらを独善的に総括すれば、次の箇条書きに要約できます。

1. 人口対策(入学試験)より、出口対策(就職斡旋)に大学の課題は移行する。

生産者の論理が通用する「売り手市場」から、消費者のニーズが優先する「買い手市場へ」需給関係が逆転したためです。特に韓・日・台で顕著です。そうなれば、学生個人のニーズに合致した「良い企業への就職」を意図した、標的市場の細分化とカリキュラムの差別化は必然となります。就職に有利とあれば、日本人学生の海外留学が大量に発生する

でしょう。

2. 教育機会のグローバル化で、文部科学省の教育制度規制は維持できない。

大蔵省が銀行や証券会社をコントロールできなくなったように、文科省の国立大学偏重「護送船団方式」は通用しなくなります。それは20世紀とともに終焉しました。事実、中央教育審議会は「わが国の高等教育の将来像」(2005年1月28日)において、文科省の役割は、「高等教育計画と各種規制」の時代から、「将来像の提示と政策誘導」の時代に移行すると宣言しています。

3. その結果、大学経営体制が革新される。

国立大学の独立行政法人化がその証拠です。私立大学に求められているのは、自己責任と教育効果の評価であり、最も重要なことは、私立大学自身が旧弊を捨て、近代的な意思決定のできる組織に脱皮することです。理事会が学校法人の経営に責任を持ち、機動的な意思決定のできる体制をつくり、それぞれが個性を持って、自らの知恵で生き残っていかねばなりません。おそらく近い将来、プロのマネジメントによる大学経営が主流になるでしょう。日本の有力企業には十分にその意思と能力があります。

4. その結果、学年別カリキュラム制度が革新される。

すでに海外姉妹校との交換留学生に単位互



換や学位を認めていますし、単位の「デポジット制」も徐々に始まっています。eラーニングが質量ともに充実し生涯教育が重視されるでしょう。特に、社会人にとってステップアップとなる専門職の資格取得講座に人気が集まります。そうなってくると、現在の「6・3・3・4制度」は空虚で効率が悪くなります。なぜ、大学は4年制なのでしょう。優秀な学生を短期間に集中的に学習させ、社会に出て活躍してもらった方が国益になると思いませんか。そうすると、大学の財政収支は根底から崩れるかもしれません。

最後に、「日本はいま不況期にあるのではない転換期にあるのだ。明治維新と戦後の社会革新を上手に乗り切ったように、日本は必ず第3のソーシャル・イノベーションを完成させるだろう」とビーター・ドラッカーは預言しています。日本の正念場はあと5年は続くでしょう。

講演会

「大学教育とベンチャー育成」

2005年2月21日(月) 午後3時～4時30分
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

講師…清成忠男(法政大学総長、大学基準協会会長、日本ベンチャー学会前会長)
主催…城西大学大学院経営学研究科ビジネスイノベーション研究会

2005年2月21日、東京紀尾井町キャンパスB1Fホールにて同キャンパス開設記念特別講演会が、大学院経営学研究科ビジネス

イノベーション研究会主催で開催されました。



条件は「意志が強い」、「楽天的である」、「ハイドワーカーである」という点があげられました。また、最近のアメリカでのベンチャー企業の動向やベンチャー教育の方法、そして日本の学生ベンチャー起業家の事例なども紹介されました。最後に、現在、起業家教育の機は熟してきており、起業家となる人材の形成や育成は、学部・大学院を問わず大学の重要な役割であるとして講演を締めくくられました。

今回の講演会は、ベンチャー学会会員など学外の方々、本学の教職員、大学院生、学部学生など、多数の参加がありました。また、質疑応答も活発に行われ、講演会は盛況のうちに終了しました。

なお本講演会の模様は、姉妹校である城西国際大学(東金キャンパス)にも同時中継され、同大学の約100名の教職員・学生が熱心に聴講しました。

大学でのベンチャー教育は、アメリカではすでに1967年に始まっていたが、日本では1992年に法政大学にはじめてベンチャー教育を行う学部ができたばかりで、歴史もまだ浅いものです。起業家教育に代表されるベンチャー教育は、日本においては、中小企業の創業が盛んであったことから、中小企業を転々と渡り歩いて経験を積んだ末に起業するというパターンが一般的でしたので、特に必要とされてはいませんでした。ところが今日、日本は産業の変革期にあり、新しい産業を起すためにも起業家をいかにして育成していくかが緊急の課題となっています。

講演では、アメリカの経営学者のドラッカーとシュンペーターのやり取りや、本田技研工業元社長の本田宗一郎氏と清成氏との交流などが紹介され、起業家の



清成 忠男氏

講演会

「DNAの時代を迎えて」

2005年4月16日(土) 11時～12時30分
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

講師…大石道夫(かずさDNA研究所長兼理事長)
主催…学校法人城西大学法人本部



4月16日(土) 11時より、東京紀尾井町キャンパスのB1Fホールにおいて、かずさDNA研究所所長(兼理事長)の大石道夫氏を講師に、学校法人城西大学創立40周年を記念する講演会が催された。

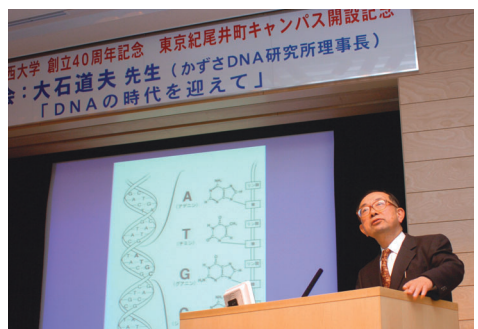
ました。多くの一般の参加者、また、城西大学や城西国際大学の先生方や学生、さらには近隣の有識者の参加のもと、最先端の科学に基づく「哲学」に触れることができました。

先生は、まず科学物質DNAについて概説され、DNAから成り立っている動植物やヒトのゲノムの全容が解明されたこと(ヒトについては2003年)を述べられました。ゲノムの解明によって、例えば今まで何十年、何百年かかった植物の品種改良が瞬時にでき



大石 道夫氏

るようになったこと、今まで直せなかった遺伝病の治療法がみつかるかもしれないこと、などDNA研究の科学的有用性について述べられると同時に、ヒトとサルのDNAの違いはわずかであること、DNAが人の性格を決定付けるかなどの社会的な問題もDNA研究の進展によって浮き彫りにされつつあることを論じられました。



記念シンポジウム

「成瀬巳喜男生誕百年」

2005年5月28日(土) 午後1時～5時
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

第1部「成瀬映画の魅力語る——成瀬映画の技法とディテールについて」

佐藤忠男(映画評論家) VS 恩地日出夫(映画監督)
第2部「小市民映画の流れ——日常の中のドラマツルギー」

香川京子(女優) VS 佐藤忠男(映画評論家)
第3部「成瀬映画のヒロイン達——林芙美子と成瀬映画」

川本三郎(評論家) VS 水田宗子(城西国際大学学長)

司会 村川 英(城西国際大学メディア学部助教授)
主催 城西国際大学メディア学部
協賛 株式会社キネマ旬報社

5月28日(土) 午後1時より4時間にわたって、東京紀尾井町キャンパスでシンポジウムが開催されました。ホールでの受講者160名に加えて、別室視聴85名、さらにJ-IUプレゼンテーションホールへの中継視聴45名の参加があり、熱気あふれるものとなりました。

シンポジウムは3部で構成されており、第1部では佐藤忠男氏と恩地日出夫氏が、「成瀬映画の魅力語る 成瀬映画の技法とディテールについて」について語られ、中でも1950年代の日本の映画状況と成瀬映画の関係について、当時、新進映画評論家であった佐藤忠男氏、また新人監督の恩地日出夫氏の

体験談は、当時の映画界の貴重な証言となりました。

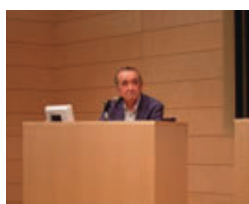
第2部では香川京子氏と佐藤忠男氏が、「小市民映画の流れ・日常の中のドラマツルギー」について語られました。香川京子氏は映画「おかあさん」の体験を語り、佐藤忠男氏は、小市民映画と成瀬巳喜男の関係を日本映画史の文脈の中で証言されました。

第3部では川本三郎氏と水田宗子学長が、「成瀬映画のヒロインたち 林芙美子と成瀬映画」について語りました。川本三郎氏は、

成瀬映画と林芙美子の類似点を、水田宗子学長は、林芙美子の世界は成瀬映画の中では物足りない表現になっているという指摘があり、白熱した論議が展開されて大変好評な結果となりました。



佐藤 忠男氏



恩地 日出夫氏



香川 京子氏



川本 三郎氏



講演会

「Kurosawa in Black and White

黒澤 明——モノクロの世界に惹かれて——」

2005年6月4日(土) 午後1時半～3時
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

講師…ポール・アンドラー(コロンビア大学教授)
主催…城西国際大学人文学部 後援…千代田区

人文学部では、日本の近代文学、映画評論、文芸評論、日本文化批評の分野で活躍されているポール・アンドラー博士をお招きして、2005年6月4日(土)、東京紀尾井町キャンパスにおいて講演会を開催しました。

演題は、「Kurosawa in Black and White 黒澤明——モノクロの世界に惹かれて」。

黒澤明は、20世紀日本映画監督界の三巨匠と言われていますが、なぜ黒澤監督がモノクロ映画の制作にこだわったのか、なぜモノクロ傑作が生み出されたのか、「赤ひげ」「姿三四郎」などの作品を上映しながら解説がなされました。黒澤監督は、兄の死を体験し、関東大震災と戦争で多くの人間の死を目にしま



ポール・アンドラー氏

講演会

「21世紀のビジネスと人材」

2005年6月17日(金)、6月20日(月) 午後1時半～3時
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

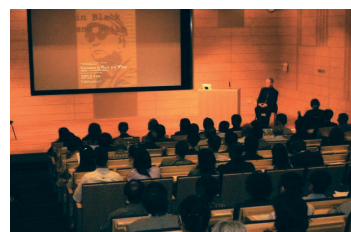
講師…6月17日 福地 茂雄(アサヒビール株式会社代表取締役会長兼CEO)
6月20日 常盤文克(花王株式会社前代表取締役会長)
主催…城西国際大学経営情報学部 後援…千代田区

経営情報学部主催講演会「21世紀のビジネスと人材」が紀尾井町キャンパスで実施されました。

6月17日(金)と6月20日(月)の2日間、のわたり日本のトップ経営者でありますアサヒビール株式会社代表取締役会長兼CEOの

され、佐藤氏からはすばらしいコメントをいただき、会場を埋め尽くした聴衆も感激ひとしおでした。また、紀尾井町キャンパスホールをうめた多数の黒澤映画ファンからは、黒澤映画の中に新しい魅力を発見した、黒澤映画の価値の高さが理解できた、まだ見たことのない黒澤映画を観たくなった、モノクロ映画を見直そうと思う、といった感想をいただきました。

なお、アンドラー氏には、6月8日(水)に城西国際大学にもお越しいただき、近代文学をテーマにして講演会を開催しました。大勢の学生が先生の講演を聴き、アメリカで日本研究がどのように展開されているか、また現在では国際日本学として日本研究が注目されていることを学びました。



福地茂雄氏と花王株式会社前代表取締役会長の常盤文克氏をお招きして紀尾井町キャンパスで「21世紀のビジネスと人材」をテーマに特別講演会が行われました。

お二人のトップから企業人としての生き方、今学生時代になにを学ぶべきか、さらに



福地 茂雄氏



常盤 文克氏



ミッシェル・タンネンバウム氏



パク・チョル氏

2005年6月25日、東京紀尾井町キャンパスにおいて、『ドン・キホーテ』の現在——東西双方方向より』と題するシンポジウムが、来賓の上智大学教授ハイメ・フェルナンデス氏や日本スペイン協会常務理事江崎桂子氏をはじめ、多くの参加を得て開催されました。このシンポジウムは、学校法人城西大学創立40周年と、紀尾井町キャンパス開設、ならびに、『ドン・キホーテ』出版400周年を記念して催されたものです。



レイチエル・シュミット氏



蔵本 邦夫氏

シンポジウムは、コーディネーターである城西国際大学人文学部のヘルベルト・ブルチヨウ教授による、本シンポジウム開催の趣旨説明から始まりました。続いて33年間、『ラ・マンチャの男』を演じ続けている俳優松本幸四郎氏からの、「夢とは、夢を叶えようとすると、その人の心意気だ」と結ぶメッセージが紹介されました。

は大学教育についても触れていただき大変感動的なお話をいただきました。また会場の学生から多くの質問が出されましたが、両氏から心のこもったお答えをいただきました。お二人に共通したご提案は以下の通りです。

大学にとって企業はお客様です。企業は製品やサービスに対して品質を保証しています。大学が創り出す製品は卒業生です。この卒業生に対して大学は品質を保証すべきです。学生の品質とは自分の頭で考えることが出来る人材、問題解決能力、人の話を聞くことが出来る人材であることです。そのために大学ではもっとリベラルアーツの教育をしっかりと欲しいと思います。

また企業が最も必要な人材はプロフェッショナルです。プロフェッショナルとは全体を見た中で自分のポジションを認識することが出来る人材です。どんな仕事でもプロになることが必要です。企業はこのプロフェッショナルの集団にしなければなりません。そのためにはプロ意識をもって仕事が出来た人材を作っていくなければなりません。大学では仕事の意義をしつかり教え込んでください。このようなご提言をいただきましたが、本学ではこのご提言をしつかり受け止め教育の質を高めていかなければならないと思います。

また、経営情報学部ではこれからも企業との深い繋がりを生かし有意義な講演会を企画していきたいと考えます。

『ドン・キホーテ』出版400周年記念国際シンポジウム 『Don Quixote, East and West』ドン・キホーテの現在——東西双方方向より』

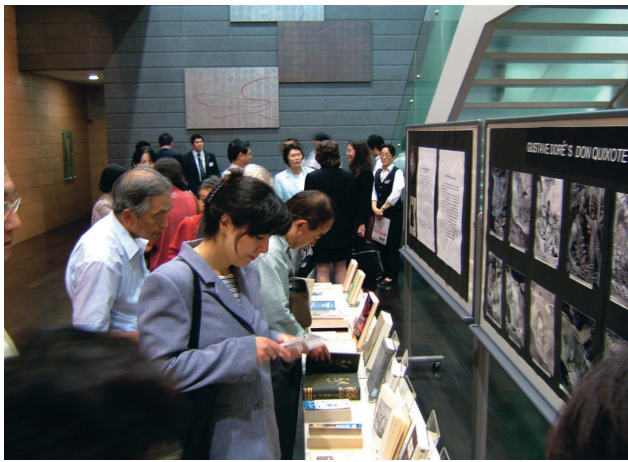
2005年6月25日(土) 午後1時～5時
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

1. 『ボヴァリー夫人』と『ドン・キホーテ』のロマン的解釈
ミッシェル・タンネンバウム(城西国際大学比較文化研究所客員研究員)
2. 『異文化間コミュニケーションとしての挿し絵』ドン・キホーテのドレーによる挿し絵のケースについて
レイチエル・シュミット(カルガリー大学助教授)
3. 韓国における『ドン・キホーテ』の受容
パク・チョル(韓国外国語大学教授)
4. 『ドン・キホーテ』と漱石
蔵本 邦夫(関西外国語大学教授)

司会：ヘルベルト・ブルチヨウ(城西国際大学人文学部教授・比較文化研究所所長)
共催：城西国際大学比較文化研究所
城西大学語学教育センター
後援：千代田区、スペイン大使館、財団法人日本スペイン協会

講演は、前・後半、各2名の演者によって行われましたが、前半のミッシェル・タンネンバウム氏は、『ドン・キホーテ』とフローベールの『ボヴァリー夫人』とを比較し、フローベールが自己の作品をロマン主義的理想から逸脱させるために、『ドン・キホーテ』の貴重なイメージを否定したことを、具体例をあげて指摘されました。続いて、レイチェル・シユミット氏は、ビジュアル・イメージがアーティストの属する文化の制約を受けた作品として、文化の境界を越えるかどうかを、『ドン・キホーテ』の挿絵を描いたフランス人のグスターヴ・ドレーレの例を引いて具体的に説明されました。

小憩の後の後半のパク・チョル氏は、韓国における『ドン・キホーテ』理解の劇的とも言える変化―無分別で単純な狂人という理解から、目的達成のためには命を失うことも恐れず、全力疾走する人間という理解へ―につ



いて詳述されました。また、蔵本邦夫氏は、漱石の『ドン・キホーテ』に対する評価と、その特異性、彼の作品への『ドン・キホーテ』の影響等について述べられました。

4氏による講演の後、ハイメ・フェルナンデス上智大学教授にもコメントーターとして参加いただき、質疑応答が行われました。現代に生きる我々に『ドン・キホーテ』は何を与えたか、『ボヴァリー夫人』はなぜ写実主義の代表作品たり得たかなど、活発な議論が交わされ、時間的制約から多くを割愛せざるを得なかったのは大変残念でした。

シンポジウム閉会后、ティーパーティーが開かれました。シンポジウムの興奮冷めやらぬ参加者が多く集い、会場のあちらこちらで談笑の輪ができていました。

和やかさと学問的緊張に溢れた本シンポジウムは、参加者に深い知的満足を与え、無事終了しました。



戦後60年シンポジウム

「映画に見る私たちの原爆体験とその記憶から」

7月29日(金) 午後1時半〜4時
東京紀尾井町キャンパスB1Fホール

パネリスト…吉田 喜重(映画監督)

齊藤 綾子(明治学院大学文学部芸術学科助教授)

リビット水田 堯(南カリフォルニア大学映画学部教授、城西国際大学メディア学部客員教授)

主催…城西国際大学ジェンダー・女性学研究所

協力…城西国際大学メディア学部／城西国際大学人文学部

後援…株式会社キネマ旬報社

広島・長崎に原爆が投下されてから60回目の夏を迎えた今年、城西国際大学は、戦後60年の節目として、東京紀尾井町キャンパスホールでシンポジウム「映画にみる私たちの原爆体験とその記憶から」を開催しました。

シンポジウムには、映画監督吉田喜重氏、明治学院大学助教授齊藤綾子氏、南カリフォルニア大学教授・城西国際大学客員教授リビット水田堯氏(兼モデレーター)の3方をパネリストとして招き、約2時間半にわたり原爆を主題とする様々な映画表現について講演と討論が行われました。この日は大変な猛暑でしたが、200名を超える聴講者が来場したため、別室で視聴する方々の姿もみられるなど大盛況でした。

パネリストの吉田喜重氏は、シンポジウムが始まる前に同ホールで上映会を行った映画『鏡の女たち』(2003年)の監督です。吉田氏は、12歳のときに郷里の福井市内で空襲に遭い、疎開先の農村で原爆投下のニュースを聞きました。自身の戦争体験をもとに、原爆を本当に知っている人はすでに亡くなった方であること、人間は全てを表現できる存在ではないことなどを話されました。過去半世紀の間、吉田氏は「あなたには原爆を描く権利があるのか」と自問し続けた末に、ようやく映画『鏡の女たち』(2003年)を撮るに至ったそうです。この作品には、コアにな



吉田 喜重氏



齊藤 綾子氏



リビット水田 堯氏

るイメージもストーリー性も存在しません。すれ違い交錯する3世代の女たちの生が描かれるのみで、彼女たちの相互理解すら存在しません。観客は映画を観た後に作り手の主張を受け取ってカタルシスを感じることができないのです。吉田監督は、「メタ」というギリシア語を引用しながら、「メタ・広島」、即ちすれすれの近づけない場所としての「広島」を位置づけ、女たちの視点から何とか「広島」を描こうとしたのだと語りました。そして、個々の観客が映像としては再現しえない広島惨事を汲み取り、多様な解釈を行って欲しいと結びました。

続いて斉藤綾子氏は、原爆を描いた映画として『原爆の子』（進藤兼人監督1952年）、『二十四時間の情事』（アラン・レネ監督1959年）、『黒い雨』（今村昌平監督1989年）、『鏡の女たち』（吉田喜重監督2003年）などの作品を挙げ、これらの映画のなかでは、女性の物語がさまざまな形で紡がれてきていることを共通項としてとらえまし



た。『鏡の女たち』を除くと、多くの場合女性性は、自身が生き残ってしまった「負い目」を抱え、また原爆による痛みと苦しみを後世に伝える存在として描かれてきました。それは原爆の「被害者」であり平和のメッセンジャーである日本を語ることに繋がりました。これに対して、吉田監督の『鏡の女たち』は原爆を徹底的に表象不可能なものとして、隠された悲劇の物語を描きました。原爆とは「失われた物語」を示し、女性性は物語が失われてしまったという歴史のトラウマの証人として描かれています。斉藤氏はこの作品が原爆に対する新しい映画の挑戦であると評価する一方で、語れない物語としての歴史のなかで、女性が戦争にどのような関わってきたのかを改めて問いなおすという課題のあることを指摘されました。

告を纏め上げました。

シンポジウム後半では、客席から原爆映画における女性の位置づけへの問いかけや、吉田監督の原爆映画への視点を問う質問などが投げかけられ、引き続き「女性の視点の評価」「原爆体験の映像化」といった観点から充実したディスカッションが行われました。「原爆映画というジャンル」（リベット水田堯氏）を論じる記念すべきシンポジウムとなりました。

本シンポジウムを企画したジェンダー・女性学研究所の矢木公子所長は、戦後60年にあたる今年、さらに敗戦直後の女性を題材とした企画を用意していると語っています。この秋「ベアテの贈り物」をはじめとする映画を城西国際大学東金キャンパスにおいて上映する予定であり、本シンポジウムでのテーマが、「平和とジェンダー」に関する企画へと発展していくことが期待されています。



学校法人 城西大学 創立40周年記念 東京紀尾井町キャンパス開設記念 秋期シンポジウム・講演会 今、あらたなる大学教育に向けて

<参加費無料><先着順・要予約>

○城西大学 理学部 主催

9月17日(土) 14:00～15:30

「すばる望遠鏡で見た宇宙」

海部 宣男(国立天文台台長)

○城西国際大学 福祉総合学部 主催

10月1日(土) 14:00～16:30

「ともに生きる地域社会を創るために」

大橋 謙策(日本社会事業大学学長)

炭谷 茂(環境庁事務次官)

野沢 和弘(毎日新聞社社会部副部長)

○城西国際大学 比較文化研究所 主催

「江戸時代の日本人は日本をどう発見したか」

1. 10月22日(土) 13:00～17:00

芳賀 徹(京都造形美術大学学長)

ヘルベルト・プルチョウ(城西国際大学教授)

板坂 耀子(福岡教育大学教授)

小島 康敬(国際基督教大学教授)

2. 10月29日(土) 13:00～17:00

源了圓(学士院)

浜田 啓介(京都大学名誉教授)

笠谷 和比古(国際日本文化研究センター)

田口 昌樹(菅江真澄研究会会長)

○城西国際大学 人文学部 主催

11月12日(土) 13:30～15:00

「恋愛思想の歴史」

小谷野 敦

(比較文学研究者・文芸評論家／国際日本文化研究センター客員助教授)

○城西国際大学 薬学部 主催

12月3日(土) 13:30～16:00

「未来の医療 薬学教育で出来ること
－健康できれいに生きる－」

天野 恵子(千葉県衛生研究所所長／千葉県立東金病院副院長)

上野 光一(千葉大学大学院薬学研究科教授)

相場 節也(東北大学大学院医学系研究科教授)

和田 誠基(城西国際大学教授)

○城西大学 薬学部 主催

12月10日(土) 14:00～17:00

「未来の医療 薬学教育で出来ること
－医療におけるところと技術－」

1. 「医療におけるところと技能」

中島 宏昭(昭和大学医学部教授)

2. 「有機の光で未来を照らす－先端技術と創造教育－」

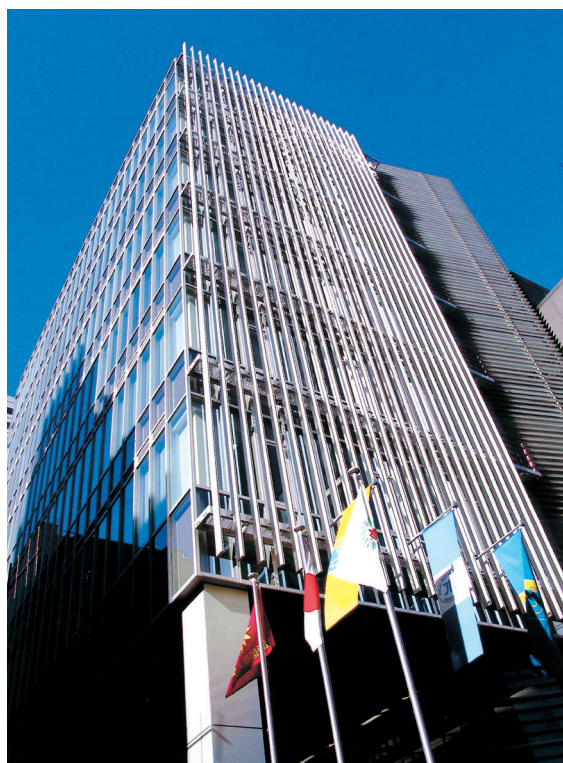
城戸 淳二(山形大学工学部教授)

●周辺図



アクセス インフォメーション

- 地下鉄有楽町線 麹町駅 1番出口より徒歩3分
- 地下鉄南北線・半蔵門線 永田町駅 9番出口より徒歩5分
- 地下鉄丸の内線・銀座線 赤坂見附駅 弁慶口より徒歩8分
- JR中央線・総武線 四谷駅より徒歩10分



学校法人 城西大学



城西大学／城西短期大学



城西国際大学

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26 TEL.03 (6238) 1300

学校法人 城西大学 <http://www.josai.jp/>

城西大学 <http://www.josai.ac.jp/> 城西国際大学 <http://www.jiu.ac.jp/>

学校法人 城西大学 国際学術文化振興センター

〒102-0094 東京都千代田区紀尾井町3-26

TEL 03 (6238) 1300 FAX 03 (6238) 1299